

令和 4 年 5 月 23 日

令和 3 年度 特別の教育課程の実施状況等について

京都府		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
京都聖母学院小学校	学校法人聖母女学院	私

1. 特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の 公表ウェブサイト名・URL 等	学校関係者評価結果の 公表ウェブサイト名・URL 等
京都聖母学院小学校	学校法人聖母女学院 情報公開 http://www.seibo.ed.jp/	

※結果公表に関する情報について、ウェブ上で公開している場合は公開しているウェブページの URL、ファイル名等を記入すること。ウェブ以外で公開している場合は、公開している情報を閲覧できる場所・方法を適宜記入すること。

※必要に応じて行を追加すること。

2. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

小学校第 1～6 学年で、各学年 4 クラスの内 2 クラスを国際クラスとする。

第 1・2 学年は、国語・特別活動・道徳（宗教）を日本語で授業し、算数・音楽・図工・体育・生活を英語で授業する。第 3 学年は、国語・特別活動・道徳（宗教）を日本語で授業し、社会・算数・理科・音楽・図工・体育・総合的な学習の時間を英語で授業する。第 4 学年は、国語・特別活動・道徳（宗教）・社会を日本語で授業し、算数・理科・音楽・図工・体育・総合的な学習の時間を英語で授業する。第 5・6 学年は、国語・特別活動・社会・算数・理科を日本語で授業し、音楽・図工・家庭・体育・道徳（宗教）・総合的な学習の時間を英語で授業する。

(※) 算数は家庭学習で検定教科書を使って予習することとしている。そこで、その学習の状況及び成果の確認と補充深化のため、第 1～4 学年で週 1 時間日本語による算数授業を行っている。

(2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

・京都聖母学院小学校は、帰国子女を積極的に受け入れており、そのような児童に対応するため、英語で教育を行う必要性が高い。また、外国人の子女の入学も多く英語で教育を行う必要性が高い。最近ではインターナショナルスクールからの入学者が増え、英語力のさらなる発

展を期待されている。

- ・ 国際人としての基礎的能力の育成のため、英語をコミュニケーションツールとして使い、単に英語を話せるだけでなく、相手の意見や考えを尊重しながら理解し、明確な目的意識をもって自分の意志を伝える豊かな表現力を育てる。
- ・ 多種多様な文化・習慣・価値観を持つ人々の立場を尊重しながら意思疎通し、好ましい関係を構築できるよう外国文化の理解を深める。

(3) 特例の適用開始日

平成22年4月1日

(4) 取組の期間

国際コースの募集が停止になるまで

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている
- ・ 一部、計画通り実施できていない
- ・ ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している
- ・ 実施していない

<特記事項>

参観日や学習発表会を通して学習の成果を発表している。また、入試関連行事においては、幼稚園や保育園、インターナショナルスクールに通う園児や保護者にも成果を見ていただく機会を持っている。

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

①実施による効果

- ・授業だけでなく休み時間においても、ネイティブ講師が身近であるため、会話を交わす事が日常的であり、コミュニケーションを取る事に対する精神的なハードルが低い。
- ・ネイティブ講師が身近である環境は、国際クラスだけでなく他クラスの児童にとっても英語の授業を進める上で大変効果的である。また、休み時間にもネイティブ講師と会話やゲームを楽しむことができる。
- ・ネイティブ講師が多国籍であるため、授業の中で多様な文化や考え方に触れる機会がある。
- ・学習指導要領に基づいたカリキュラムで授業を実施しているため、中学校進学後の学習についても不安がない。

②課題

- ・学年・教科によっては、1クラスに4人の教員を配置したり、教科によって担当する児童が変わったりすることもあり、クラスに関わる教員数が多い分、きめ細かい指導が出来る反面、情報共有するための時間確保や調整が難しい。
- ・ネイティブ講師が非常勤で、週当たり25時間前後の授業を持っているので、日本人教員との打ち合わせ時間の確保が難しい。
- ・学んだことをアウトプットする力をつけるためにプレゼンアプリやソフトの使い方をマスターし考えをしっかりと伝えることができるようになること。
- ・入学時から続けているインターネットを使ったPC学習が3年生頃から滞る。3年生以上の学習をどう進めるか。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

- ・英語の4技能においてバランスよく力をつけることが理想だが、リスニングについては、1年生からの積み上げによって秀でた力をつけることができている。
- ・学習指導要領に則った教育課程を組んでいるので、卒業時には小学校でつけなければならない各教科等の力については問題なくつけている。また、高学年に進むにつれ、算数・理科・社会では日本語による授業を実施し確かな学力をつけることができるよう進めている。

5. 課題の改善のための取組の方向性

- ・アウトプットの機会を多く設けて、学んだことを生かす環境づくりを進めていく。引き続き情報機器を使用し、プレゼン等積極的に行うようにしていく。
- ・1年生の入学時から進めているPCのオンライン学習に関して、高学年においてもいかに継続させるかが課題となっている。提供業者とも連携を取り、オンラインによる学習支援会や英検対策を目的としたソフトの利用などの奨励などを計画している。
- ・ネイティブの時間の確保には、費用がかかる。授業料のアップを検討せざるを得ない状況になってきている。